

平成26年度 兵庫県立小野高等学校 学校評価報告書

重点事項:学力の向上による進路保障		自己評価(A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった)				学校関係者評価	
年度努力事項と具体的取り組み	主担当	成果	評価	課題	改善策等	自己評価の適切さ	
授業力の向上	1年	教材の選定・作成を共同で行うなど、昨年以上に教科内での連携が深まった。昨年度の課題であった教科間の連携は、朝学や土曜補習の時間配分や生徒負担について英教団でうまく調整できた。生徒に課す学習量(特に週末課題)についても、学年会において情報を共有し、適切に調整できた。	B	B	他回生と比べ、自律した学習能力がやや劣っている。基礎基本を大切に授業を展開した上で、自らが計画的に、発展的な課題に取り組む力を伸ばしていく力をつける必要がある。	MPI等の心理検査を活用して生徒一人一人にあった指導の仕方を実施する。学習到達度を測る模試を実施し、学力状況、学習状況を共有し、きめの細かい指導をする。ROCK(Recording of continius knots)を今年も継続し、深化する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業力の向上に関する小野高等学校(以下、学校と表記)の自己評価結果は概ね適切と考えられる。</li> <li>・学力向上研究推進プロジェクト指定を受けて公開授業週間、生徒による授業アンケートといった取組が推進され、生徒の授業満足度・理解度が高まっていることは積極的に評価できる。</li> <li>・授業改善については、教員個々の努力が重要ではあるが、教科担当者間等での課題意識や優れた実践の共有などの組織的次元での取組も重要である。昨年度以来教科担当者間の連絡の活発化や小テスト共有などの取組が進められているが、授業研究の活性化や授業アンケートを介した教員間の協議等についても一層の充実を図り積極的に発信してほしい。</li> <li>・生徒アンケートの結果等をみると、生徒の家庭での学習時間についてやや課題が感じられるが、低学年の担任団を中心に、丁寧なアセスメントに基づく指導の改善が図られていることは今後に期待できる。継続的な点検・改善で成果を上げてほしい。</li> </ul>
	2年	教科担当者内での連携をとり、授業で扱う内容や授業進度を確認している。小テストも共有し、分析することでその後の授業の進め方など改善をおこなっている。教科会等でも意見交換を行っている。	B		授業の中で基礎から発展的内容まで幅広く扱うため、授業進度が速くなってしまっていることがあり、理解できていない生徒も見受けられる。	教科会議などを通じてさらに連携を図る。特に理科・数学は新教育課程2年目であり、試行錯誤しながら実践したことを伝えていく。	
	3年	教科の垣根を越えて、センター演習や二次対策に取り組むなど、学年全体で生徒の進路実現に向けて効果があるように授業の構築に工夫をこらした。	B		新課程入試1年目で、理科の基礎科目導入や数学の負担増などにより、細分化が必要となり、対応が十分にできていないこともあった。	教科会議などを通じてさらに連携を図る。特に理科・数学は新教育課程入試初年度であり、試行錯誤しながら実践したことを次年度に生かせるよう学年間の連携をとっていく。	
2 新課程入試に向けて入試問題分析を行い、授業力の向上に努める。	進路	各学年の模擬試験毎に、他校比較や過年度比較を行い各学年で分析を行った。また、提供した分析資料を基に各教科で分析を行った。模試結果や入試結果については全職員で共有した。センター試験の結果についても分析を行い、職員会議で説明と今後に向けて新たな提案を行った。	A	新しい大学入試に対応した受験指導が必要になることから、各教科での授業力の向上を図る必要がある。	今後は校内実力テストの問題と解説を作成することで、各教科での大学入試に向けた授業力の向上を図る。		
3 7月と12月に授業評価を実施し、問題点を明確にし、授業の改善を行う。	学力向上	7月と12月に各学年各教科ごとに授業アンケートを取り、分析結果を職員会議で報告した。それをもとに各教科、各学年でも分析し、その後に授業に活かしたり、各ホームルームや学年集会で注意喚起をした。その効果が12月のアンケートで良い結果として表れた。学習状況調査や学校評価の学習に関する項目の結果を見て生徒が前向きに学習に取り組む様子がわかった。	A	学習に対して前向きな姿勢にはなっていないが、家庭での学習時間にはあまり反映していない。受験を意識して学習に取り組むのが時期的に遅い。	各担任で家庭学習時間調査や個人面談など頻繁に行っているが、動向などを注視し、各教科や学年でも注意喚起が必要。校務、会議をできるだけ減らし、担任が生徒と向き合える時間をできるだけ作る必要がある。受験に向けての対策は進路との連携が必要。		
すべての生徒の学力の向上	1 平成26年度新教育課程を円滑に実施するために、バランスの良い時間割を作成する。	教務	4月から仮の時間割で運用し、課題を見つけ、5月から確定した時間割で、運用した。教室をバランス良く配置し、単位数に応じて曜日の振り分けもおおむねよくできた。	B	同時開講科目などで一部バランスの悪い科目があった。	同時開講科目など、後で動かしにくい科目についてはあらかじめ手作業で入れておくなど工夫する。クラス編成の段階で時間割を組みやすいクラス編成にする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度以来、生徒の学習状況等の丁寧なアセスメントに基づく朝学習・補習の充実や教育課程の改善が図られている。</li> <li>・朝学習や小テストの手立てについての教員の意識は高まっているが、学校評価アンケートによる生徒の意識は必ずしも高いと言いきれない。これらの手立てを生徒の意欲や学習内容定着につなげる方法については、他校での優れた実践の調査研究等を通じて学校の取組の改善への示唆を得ることも考え得る。</li> <li>・商業科・国際経済科における検定1級取得率については、一部に指標値を回復したものもみられるが(3種目合格者数等高いレベルの実績を残している側面もある)、全体の取得率の低下がここ数年来大きな課題とされている。この点について、学校として「高水準の取得率」という「成果指標」を目標の前面に据える学校の姿勢は尊いと感じつつ、その目標達成への「解決すべき課題」「そのための手立て」(取組指標)が必ずしも明確にされないまま毎年の評価が行われていることに若干の課題を感じる(毎年の評価報告書では、「改善策」として一定の記述は見られるが、それらがどの程度実現され成果が検証されたのかは判断しづらい)。成果指標・取組指標の双方(目的・手段関係)を一層意識した今後の検証・改善を期待したい。</li> </ul>
	2 生徒ひとり一人の進路実現をめざして、より適切な教育課程の編成を工夫する。	教務	平成27年度入学生(70回生)の教育課程を見直した。観点は、①1年生の座学時間の増加 ②理科の増単(理系) ③英語重視(1年及び理系)	B	①目指すべき人間関係(生徒徒)と教育課程との関連の考察 ②本校生徒の外部成績の低下や進学実績の伸び悩みと教育課程との関連の考察 ③教育内容と教育方法の工夫	①本校の教育目標の再認識と職員の共通理解 ②授業時間の確保(学校行事の減少ではなく)や過あたりの総授業時間数の増加 ③学習習慣・方法の確立と基礎基本の定着	
	3 朝学習の内容を精選し、基礎基本事項の定着を図り、補習や面談を通して、学力不振者へ丁寧な指導を行う。	進路	各学年とも朝学習を行い学習の習慣化に努めた。土曜補習を年間計画表に組み入れ定着化を図った。土曜補習を通して学力不振者への指導を行うことができた。	B	定着化してきた土曜補習を低学力層から成績上位層まで希望参加できるようにしたい。	2年2学期から大学受験を意識させた土曜補習を行う必要がある。	
		1年	朝学習は毎日行っており、基礎学力の定着を図っている。また、早朝の英単語・漢字小テストを実施し、クラスごとの結果をグラフで視覚化してフィードバックしている。学期ごとに小テストの個人成績表を配布し、三者面談においても主要資料として活用している。前述のROCKを活用し、小テストの学習は毎日学校の隙間の時間を利用して行うことを指導し、多くの生徒がそのようにするようになった。	A	毎日5分学校で隙間の時間を利用して英単語・漢字の学習を行うことは、ルーティンワークとして根付いてきたが、習得した単語の定着がまだまだである。	定期考査に小テストの範囲を含め、定着率を把握し対策していく。さらに、生徒の意欲を引き出していく。	
		2年	2学期より理科(文系は生物基礎、理系は化学)も朝学習に含めることにより、基礎的内容の理解を図った。土曜補習については、英教団をおこなったが、特に9月～10月・1月においては数学に限定して2時間実施するなど教科の特性や理解度に応じて実施した。担任との二者面談の中でも、特に学力不振生徒については、日々の学習時間記録に基づいて普段の生活から見直しをさせた。	B	進路目標が明確でなく、学習意欲が希薄な生徒もおり、土曜補習の際は理解できても普段の学習を継続的におこなえていない。	普段の学習状況や定期考査などの結果を踏まえ、朝学習の内容を精選し実施する。土曜補習等の中で基礎項目の理解を図る。	
	3年	1年次からおこなっている朝の学習を継続し、基礎事項の確認と基礎力の充実を図った。6月からは放課後補習、土曜補習も実施し、夏休みにもさまざまな科目の補習を実施するなど、多様な入試形態にも対応できるようにプログラムを組んだ。さらに、主体的に学習に取り組ませるために、土日などの休日に学校で自習できるような環境づくりをおこなった。	B	入試を意識した演習において、基礎事項の欠落がある生徒に対しては、対応がなかなか難しかった。また、入試を控え、不安を抱く生徒もおり、面談等をおこなったが、自信を回復するには至っていない。	成績に不安がある生徒に対して個別に指導するとともに、担任や主任との面談を通じて最後まで粘り強く取り組むことの重要性を再認識させる。		
4 専門科目の着実な定着を図るために学科や学年に応じた指導を行うとともに、全商主催検定1級の取得率の向上に努める。	商国	検定試験名 合格 受験 H26 H25 1級電卓珠算実務検定 ←56/104(53.8%)←67.9% 1級ビジネス文書検定 ←11/30(36.7%)←42.7% 1級簿記実務検定試験 ←48/109(42.6%)←42.4% 1級英語検定試験 ←49/178(27.5%)←38.5% 1級情報処理検定試験 ←72/177(40.7%)←32.5% 1級会計実務検定試験 ←2/10(20%)←11.1% 1級商業経済検定試験 ←27/54(50.0%)←39.1%	D 1級 35.6%	全体の1級取得率の低下は今年度も改善できていない。卒業時の3種目以上合格者数並びに全9種目合格に関しては、兵庫県でもトップの実績となっているが、1回目の受験で合格できていない現状と、難度が高い検定の合格率は低迷する傾向が今年度も続いている。	新カリキュラムの導入で、授業時間数が減少し、今まで以上に生徒に対する意識づけを徹底するとともに、授業に臨む姿勢(予習・復習の定着)など、きめ細かな対応が一層必要になる。質の良い授業及び、効率的な自宅学習へつながる課題をだし、学習サイクルの確立と、時間管理の方法を身につけさせたい。また、生徒からの授業アンケートを参考にしながら、よりよい授業に改善していく努力を今後とも続けていく。		

項目と具体的取り組み	主担当	成果	評価		課題	改善策等	自己評価の適切さ	
進路実績の向上	1 第一志望校決定に際し、主任面談を実施し、進路実現に向けての意欲を高める。	2年	目標設定において迷いが生じている生徒との面談の中で、普段の生活を見つめさせることにより、目標を現実的なものとし、進路実現への意欲を高めさせることができた。	B	B	第一志望届が1月下旬以降の提出になるため、現時点では第一志望届提出による主任面談を実施できていない。	今後、生徒が部活動に参加する時間を考慮しながら、第一志望届を提出できた生徒から順次主任面談を実施し、生徒全員の進路意識を高めていく。	<p>・「進路実績の向上」をBとする学校の自己評価は概ね適切と考える。新教育課程への移行の状況下で、学校の取組やその実績についての報告書の内容は昨年度と大きな変化が見られないが、学校関係者評価委員会での討議により、学校側で「第一志望届」提出前後の指導の充実が図られていること、それに対する生徒・保護者の評価が高いことが確認された。</p> <p>・学校側で体系性ある進路指導が組まれていることは理解できるが、生徒には卒業時の大学等への進路についての指導に留まることなく、将来就く職業等についてイメージさせることもバランスを取って行ってほしい。</p>
	2 実力考查結果を各教科、個々の生徒について検討し、個人成績推移や学習記録を有効に利用した面談等を通じて、進路指導に生かす。	3年	担任や主任との面談を通して、生徒一人一人に適切な進路の選択をめざすとともに、学年集会などの機会を通じて、チームとして入試に立ち向かう意識付けを行った。	B		第一志望届を提出した後も、成績の推移や本人の志望の変化などにより、志望校を絞り切れない生徒もいた。	担任との面談だけでなく、主任面談を再度行うなどにより、志望校に対する意識の向上を図る。	
	3 学年別に進路研修会を持ち、生徒の学習状況や大学入試情報を共有し、生徒の進路実績向上に努める。	進路	「入試動向研修会」を持つことで、現状の入試状況と新課程入試に関する情報と対策を職員間で共有することができた。大学入試情報やオープン模試の過去問を共有フォルダ内に保存し、全職員が調べられるようにした。	B		「新課程入試」や「到達度テスト」に向けた情報を共有化する必要がある。	「新課程入試」や「到達度テスト」に向けた情報を収集し職員研修を行う。	
		1年	模試毎に教科の分析結果を学年で共有して、各教科の今後の展望や戦術・戦略を検討した。その後、各教科の指導や三者面談での指導に役立てた。	B		全体的に生徒自身が自ら課題意識・進路意識をもって行動するまでには至っていない。	3学期に進路に関するホームルームを実施し、意識向上を試みる。大学・学部学科研究を実施する。	
		2年	年度当初に、新課程(理科・数学)についての研修会をおこない、大学の入試情報を共有すると共に現2年生の状況について分析した。さらに、12月に第一志望校検討会を実施して、1人1人の状況と今後の進路について担任や教科担当者からの意見を踏まえ第一志望について検討し、三者面談などで生徒へフィードバックした。	B		新課程入試実施初年度(理科・数学は2年目)であるため、情報の共有を常に行う必要がある。	毎週の学年会議や普段の教師間の対話等を通じて生徒の状況を確認すると共に、外部研修会への参加により入試情報を得て、学年等での共有を図る。	
		3年	各学期末ごとに、成績状況確認会を実施し、生徒1人1人の状況を学年全員で共有した。センター試験後には、各業者の説明の報告会に出席するとともに、進路指導部と学年職員全員で出願検討会をおこない、受験校決定に活用した。	B		新課程入試実施初年度であるため、情報の共有を常におこなってきたが、理科の基礎科目や数学の新分野(整数・データの分析)について手探りの状態であった。	新課程入試初年度の状況を学年間で共有し、次年度以降に活かす。	

重点事項:豊かな人間性を持った生徒の育成

自己評価(A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった)

学校関係者評価

年度努力事項と具体的取り組み		主担当	成果	評価	課題	改善策等	自己評価の適切さ	
規律ある態度の育成	1 生活3原則の徹底。特に、登校時の生徒の様子を把握し、心のこもった挨拶ができるように働きかける。	生徒指導	登校時の遅刻は、2月終了時で1日あたり0.18人であり、昨年より下回った。目標であった年間遅刻者ゼロには及ばなかったが年々減少している。	A	A	遅刻はほとんどが常習者であり、担任を中心に個別指導を行っている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>「規律ある態度の育成」をAとした学校の自己評価結果は適切と考える。</li> <li>社会環境の変化(家庭でのSNS利用等)や生徒の変化により、生徒指導上の新たな課題が生じていると思われるが、各学年において丁寧な生徒理解を図った上で、「生活三原則」の徹底と生徒の自主性の両立を図った指導が行われている。遅刻者の減少の成果を上げている点も高く評価できる。</li> <li>上と関連して、教員学校評価アンケートからは、マナー向上やあいさつなどについての効果意識が高まっていることが推察される。ただ、生徒の意識(生徒対象の学校評価アンケート)とは若干の乖離が感じられる。現在の努力を継続発展させながら、小野高校生が校内に留まらず通学途上その他日常生活においても適切な容儀を実践できる高みを目指してほしい。</li> </ul>	
		1年	学年主任は毎朝Rockを点検しつつ8人ずつ面談を行った。副主任は毎日校門立ち、生徒の登校の様子を確認しながら生徒に向き合った。担任全員が朝のホームルーム前に教室に入り、登校直後の生徒の様子を確認している。メンタル面で問題を抱える生徒を早期に発見し、適切に指導することができた。	A		学校にいる間の生徒の状況は十分に把握しており、3原則に則った学校生活を送っているが、学校外で同じように行動できているかという点において心許ない。公共交通機関でのマナーや家庭生活で自律した責任を果たせるように指導していく必要がある。		MPI・ROCK・成績データを更に有機的に関連づけて、立体的な生徒理解を行う。学年団一人一人が、生徒と個別に面談をできる時間を更に確保し、信頼関係の向上に努める。
		2年	SHRでの担任の話や各係からの呼びかけ・学年集会での生徒指導担当者からの話などにより生活3原則を再認識させるとともに、清掃の指導や行事での時間厳守などにより徹底を図った。副主任が中心となって登校時の様子を把握し、朝気づいた点についてはすぐ担任に伝え、指導に生かしている。	B		不登校傾向の生徒が、遅刻をすることがある。提出物などにおいて、提出期限を守れていない生徒も見受けられ、時間厳守がなされていない場合がある。		不登校傾向にある生徒とじっくり話することにより学習や進路に対する不安を和らげ、生活習慣の見直しを図る。提出期限の守られていない生徒については、担任・教科担当者から注意喚起し、改めて時間厳守の大切さを知らせる。
		3年	様々な機会を通じて、学年目標「自ら考え ともに支えあい努力する」ことの重要性を話し、各自の生活態度についての見直しを示唆した。学校行事に対する取り組みの中で、最上級生としての自覚をもたせた。個別の指導を要する生徒については、学年が連携して指導に当たった。	B		不登校傾向の生徒等、遅刻をする生徒がいた。		生徒の状況を見て、面談などをおこなう。日々の生活を振り返らせることにより生活習慣の確立を図る。
	2 部活動の活性化を推進しながらも、効率的な練習計画により学習との両立を図る。	生徒指導	全校生の97%の生徒が部活動に所属し、学習と部活動の両立を目指し、日々熱心に取り組んでいる。	A		両立の難しさを感じており、時間の使い方に課題がある。		部顧問・担任・教科担当の連携を強化し、学習時間を確保できるよう努める。また、規律ある行動が取れる生徒の育成が望まれる。
		1年	各クラスの委員長・副委員長で組織する評議委員会を水曜の昼休みに開き、上意下達ではなく、生徒自身の自主自立の体制を作った。非効率なところもあるが、長い目で見れば、大きな成果が上がると考えている。	A		評議委員の理想と現実の成果との乖離が大きかった。評議委員に不安を抱かせないような心のケアが求められる。		リーダーを支える学年クラス作りをいっそう進める必要がある。教師から指導、注意されて成長するのではなく、生徒お互いが声をかけ高め合っていく体制、雰囲気を作る。
		2年	体育大会でのクラス応援・コーラス大会の歌唱練習・修学旅行でのエイサー練習などクラス全員でおこなうことによりクラスの一体感が高まり、一人一人の絆が深まった。また、体育大会での応援リーダー・コーラス大会での指揮者や伴奏者・修学旅行での旅行委員などの活動により、リーダーとしての自覚を持たせることができた。	A		クラスのリーダーが固定化されてしまうことがある。また、クラス全体での活動をやる苦手とする生徒が精一杯取り組み過程において、しんどくなってしまっている。		クラス全体のリーダーでなくても小単位の班長(修学旅行の研修班長や体育大会の着付けのリーダーなど)をすることにより、グループをまとめる経験を積ませる。
	3 体育大会・コーラス大会などをとおして、クラスの一体感としての意識を高めるとともに、学校行事を通じてクラスをまとめるリーダーを育成する。	1年	最終学年であるという意識を持ち、それぞれの行事において生徒自らが積極的に取り組み、リーダーシップも育った。学年集会等において、受験勉強も団体戦であるという意識を持たせるよう努めた。	A		体育大会を最後に学校行事がなくなり、各自の受験勉強となったことにより、2学期後半には、クラスで団結する機会があまりなかった。		体育大会終了後、学年集会が少ないため、進路HRや朝のSHR等を利用して、受験は団体戦であるという意識をもたせる。
		2年	6月と12月の年2回、クリーンキャンペーンを実施し、小野駅や商店街周辺の清掃活動を実施した。1回目は約200名、2回目も約200名の参加となり、有意義な活動となった。	A		参加生徒の大半が部活動を通じての参加であるが、部活動における年間行事として根付いてきた。今後は学校全体での取り組みが望まれる。		意識向上を図るための取り組みを生徒会執行部を中心に考えていきたい。
3年		野球部、吹奏楽部、家庭科研究部、天文部、物理部、囲碁将棋部、ダンス部、商業科・国際経済科の生徒が地元の商店街や老人クラブ、小学生・中学生などと交流を行い、いずれも有意義で充実した内容のものを行うことができた。	A	特定の部活動や科、以外にも交流の幅を広げていくことが望ましい。	活動内容や日程等早めに計画を立てることで参加する団体の数をふやしていきたい。			
ボランティア体験の実施	1 生徒会行事に積極的に参加し、学校周辺の清掃活動を実施することで、奉仕精神を高める。	生徒指導	6月と12月の年2回、クリーンキャンペーンを実施し、小野駅や商店街周辺の清掃活動を実施した。1回目は約200名、2回目も約200名の参加となり、有意義な活動となった。	A	参加生徒の大半が部活動を通じての参加であるが、部活動における年間行事として根付いてきた。今後は学校全体での取り組みが望まれる。	意識向上を図るための取り組みを生徒会執行部を中心に考えていきたい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>ボランティア活動については、これまで同様、地域や地元小中学校と根付いた安定的な取組ができています。一方、自己評価においては特定の学科・部活動に留まる課題が引き続き意識されているところである。</li> <li>活動の有意義性に照らせば、学校の自己評価をAとする判断は妥当と考えるが、このようなボランティア活動や地域連携(後述)の取組を全校的に展開する一層の工夫を図り、生徒の地域貢献意識の涵養を重視する第2期ひょうご教育創造プランにおける先導的な役割を小野高校が果たして欲しい。</li> </ul>	
	2 寺子屋交流事業や老人ホーム訪問、実験観察教室など「高校生ふるさと貢献活動」に積極的に取り組むことで、地域との連携を深める。	総務	野球部、吹奏楽部、家庭科研究部、天文部、物理部、囲碁将棋部、ダンス部、商業科・国際経済科の生徒が地元の商店街や老人クラブ、小学生・中学生などと交流を行い、いずれも有意義で充実した内容のものを行うことができた。	A	特定の部活動や科、以外にも交流の幅を広げていくことが望ましい。	活動内容や日程等早めに計画を立てることで参加する団体の数をふやしていきたい。		
	3 職員の人権意識を高めるとともに、各学年の「生き方ホームルーム」を充実させる。	人権	各学年の人権担当と専門部の連絡を密にして班別研修を充実させ、学年毎の学習テーマに沿って活発な意見交換を行うことができた。また、学習テーマに基づいた講演会や視聴覚教材の導入などを適切に行うことができた。	A	学校独自のアンケート調査の分析をもとに、中学校での取組内容を把握し、本校の各学年毎の学習計画に沿った企画・立案を行い、さらに内容の充実を図る。	アンケートの項目内容を現状に応じて検討を加え、生徒の実態がよりよくわかるものに改めていく。各学年の担当者との連携を深めつつ、3年間を見据えた計画の立案を行う。		
人権教育の充実	2 海外の人々との交流を通して、文化や価値観の多様性を認識させる。日本の文化を紹介できるようにする。	国際理解	オーストラリアの姉妹校訪問を通して、文化や価値観の違いを知るとともに、日本文化の良さも再認識した。また語学学習に対する意欲がさらに高まった。	A	①公園のベンチに置いた鞆から、財布を盗まれた者がいた。②帰りの飛行機の急な変更を各家庭に連絡するのに手間取った。	①事前指導において、荷物管理の大切さを強調する。②ラインなどによって生徒個人に連絡させる。		
	3 生徒への教育相談の充実とともに、先生方へは校内カウンセリングマインド研修会を実施し共通理解を図る。	保健	教育相談を実施し、カウンセラー(臨床心理士)からのアドバイスを受け、悩みや不安を抱えている生徒と保護者、教職員に対して問題解消の軽減ができた。また、研修により生徒理解が深まった。	A	対象生徒への周囲の生徒や教員の適切な対応が課題である。	教員や周囲の生徒がより理解者・支援者になるような取り組みを継続して研修し実施する必要がある。		

重点事項: 地域に信頼される学校づくり

年度努力事項と具体的取り組み		主担当	自己評価 (A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった)			学校関係者評価		
			成果	評価	課題	改善策等	自己評価の適切さ	
情報発信の手段と内容の充実	1 HP、学校公開、学校評価の充実と学校案内パンフレットを充実させる。	情報図書	図書委員による書籍紹介を各学期行ったり、図書館報等を定期的に発行したりして、図書館情報を周知し、読書への動機づけを図ることができた。HPにも掲載し、保護者や地域に対しても情報を発信することができた。	A	図書委員の活動が書籍紹介などイベントになった嫌いがあり、生徒自身による図書館の活性化を模索すること。	図書委員会の充実など。	・「情報発信の手段と内容の充実」については、新通学区導入の状況下で学校として危機感を持った取り組みがなされ、各種広報媒体や各科の成果発表機会を活かした情報発信の充実が図られている。自己評価をAとした学校の判断は適切と考える。地元を中心とした中学校との情報交流に今後も努力いただきたい。 ・小野高校は多くの学科・コースをもち、それぞれに魅力ある教育活動が多く展開されている。逆に言えば、ウェブサイトの設計(わかりやすさの追求)には他校以上の難しさがあるだろう。現在のホームページにおいても、閲覧者の多様性に対応する工夫がなされていることが窺えるが、ユーザビリティ向上への努力を今後も継続していただきたい。 ・保護者対象の学校評価アンケートの現状の分析方法では、各項目における保護者の「わからない」(あるいは無回答)の比率がわかりづらい。こうした点を精査することで学校の情報提供の課題を精査でき、保護者の協力意識を高める情報提供を具体化できると思われる(なお、学校側からは保護者の各項目への「分からない」あるいは無回答割合はおしなべて高くないとの説明を受けている)。	
		総務	昨年作成したパンフレットのデザインを改良し、本校の魅力をより効果的に発信することができた。学校公開では、公開授業の内容一覧を作成したり、進学相談会を実施したりしたことで好評を得た。オープンハイスクールでは、放送部作成の学校紹介ビデオが非常に好評だったほか、本校生徒との座談会の方法を工夫し、従来よりも大きな成果を得た。	A	校区が広がったことで、中学校の申し込み方法が統一され、従来の方式での申し込みと紛らわしくなってしまった。	地区の高等学校の統一申し込み形式を早めに確認して、中学校に伝えていきたい。		
		学校評価	情報図書部と連携を密にし、学校の現況を分かり易く伝える資料を作成し、発信に努めた。	A	A	多くの人にHPの学校評価に関する部分を閲覧してもらえるように分かりやすく、ビジュアルな資料を作成しなければならない。		項目のまとめかた、色彩の使い方等工夫をすることで、次年度にはより見やすくなりやすいものに改善してゆく。
	情報図書	2 平成27年度入学者選抜からの新通学区(第3学区)における本校の特色を、ホームページを通じ強くアピールする。	情報図書	タイトルメニューやWEBフォントの手法を取り入れ、小野高校オリジナルなホームページデザインが作成できた。	A	より充実した内容とともに、シンプルで速報性のあるHPを作成し、本校の特色をアピールしていく。		行事等の配信はBLOGで行い。また学習と教科の学習をサポートする内容を、リンクだけでなく小野高校独自のものを作成したい。
3 探究発表会において、探究活動の成果を口頭とポスターにて発表し、保護者や近隣の中学生などへ取組を情報発信する。	科学総合	探究発表会では、口頭発表の他、ポスター発表も行う。また、科学総合コースの保護者に探究発表会の案内を文書にて出すことで、情報発信に努める。また、蜻蛉祭においてポスター展示を行い、来場者に研究成果を説明し、質問や助言を受け、探究を通じた交流を促した。	B	蜻蛉祭におけるポスター展示では、文化部所属の生徒が抜けてしまい、説明を担当する生徒の数が限られている。ポスターを掲示しているだけの状態になりがちである。	誰がどの時間帯にポスターセッションを担当できるのかを事前に調べ、特定の時間帯に必ずポスターの前で来場者を迎えるなど、発表の工夫を行う。			
教職員の意識の高揚	1 7月、12月に学校評価アンケートを実施し、PDCAサイクルを機動化させて教育活動を活性化させる。	学校評価	年間2回のアンケートを実施し、PDCAサイクルを機能させて、本校の教育活動の発展に寄与することができた。	A	昨年度にアンケート項目の精選を行い数年間継続実施することになっているが、追加・変更した項目も速やかにPDCAサイクルに反映させる。	アンケート結果をできるだけ客観的に評価し、説明責任を果たせるよう、次年度以降より質の高い分析へと発展させる。	・学校評価アンケート結果から、生徒・保護者の部活と学業の両立意識の課題、教員の部活動への関与度合いの課題が学校側で意識されているようである。ただし、学校側では顧問と教科担当者の情報共有の活発化による生徒理解の向上や効果的指導の確立の改善策を示している。来年度において、その手立てが確実に実行されることを期待したい。	
	2 学期ごとに「生き方ホームルーム」の事前研修会を実施し、効果的な授業方法の検討と人権意識の向上を図る。	人権	各学年の人権担当と専門部との連絡を密にして学年別の事前研修会を持ち、活発で充実した意見交換を行うことができた。教材の選択と学習内容についても改善をはかることができた。	A	各学年の人権担当者が計画立案が円滑にできるように、適切な教材の収集や整理を行う。	年度末のまとめと実践発表を踏まえ、各部署との連携をさらに強化して次年度の計画立案を行う。		
	3 学年団だけでなく、部活顧問や教科担当者との情報交換を密にし、生徒理解に努める。	1年	部活動をやめてしまった生徒情報をすぐに入手できた。学年では面談をして、生徒会活動に参画させるなどして、適切にケアすることができた。授業態度などの情報も教科担当者よりリアルタイムで入手し、適切に指導することができた。10月に拡大会議を実施し、関係者の共通理解を図った。	A	B	情報交換・協力体制の構築において、この生徒に応じたきめの細かさが更に必要である。		すべて顧問と一層の信頼関係を築き、ともに生徒を育てていくチームのメンバーであるという連帯意識を熟成する。
		2年	学力不振者や普段の生活の中で不安定である生徒について、顧問との情報交換の中で部活動での活動状況を把握することにより生徒理解に努めた。また、教科担当者との情報交換の中で、学力不振者の状況を確認した。	B	学力不振生徒など気になる生徒の状況を確認することが多く、1人1人の生徒についてさらに情報交換を密にする必要がある。	部活動顧問や教科担当者との会話を通じて、部活動への参加姿勢や課題提出や授業での様子など教科への取り組み姿勢を確認し、生徒理解に努める。		
3年	部活動引退までは、通常の会話の中で顧問との情報交換を行い、部活動での活動状況を把握し、生徒理解に努めた。また、同様に教科担当者との情報交換により、学力不振者の状況を確認した。	B	志望校が確定していない生徒や成績不振の生徒などの状況を確認することが多く、部活動引退後の生活など1人1人の状況を把握する必要がある。	部活動顧問や教科担当者との会話を通じて、部活動への参加姿勢や授業中の様子など教科への取り組み姿勢を確認し、より一層生徒理解に努める。				

項目と具体的取り組み	主担当	成果	評価		課題	改善策等	自己評価の適切さ	
地域との連携	1 商業科・国際経済科全員と普通科希望者へインターンシップを実施し、地域との連携を図る。	インターンシップ	商業・国経の生徒全員と普通科の生徒1名(昨年は29名)が参加した。新たな事業所の開拓を行うとともに、地域の事業所との連携を図ることができた。普通科の希望者が昨年よりも減少した。インターンシップ後の礼状指導を加えるなど、より充実した指導を行った。	A	A	普通科生徒へのインターンシップ参加の呼びかけが十分ではなく、参加人数が少なかった。	普通科生徒の参加者を増やすために、学年と協力する必要がある。	<p>・各科において地域の実情に合致した分厚い連携の取り組みが図られており、学校の自己評価結果Aの判断は適切と考える。インターンシップについても、経験後の生徒のアンケート結果に飛躍的な伸びが見られ、地域の理解を得て実効的な取り組みがなされていると分かる。</p> <p>・本報告書他項目で記載したように、学校においては全学科の生徒に、将来就く職業等をイメージさせながらの進路指導を充実させてほしい。また、ボランティア活動やインターンシップ等を通じた地域連携により、第2期ひょうご教育創造プランで重視される地域貢献の精神を効果的に生徒に培っていただきたい。そうした観点を前提として、普通科生徒へのインターンシップ参加の促進等の取組を適切に進めていってほしい。</p>
	2 地元企業と連携した販売実習や専門科目の授業を利用した商品開発、地域の課題解決の調査研究活動を実施する。	商国	「英語実務」「中国理解」選択者が河合中学校・小野東小学校で英語および中国語の模擬授業を実施。身につけた知識・技能を活用するとともに、言語活動を充実する機会となった。「商品開発」の授業においてアイカーボンと連携し、炭火を用いた商品開発を実施した。これまで身につけた知識・技能を商品開発に生かすことができた。「課題研究」は、昨年同様さんふらわーFESと称して地元商店街の活性化や店舗経営を行い、充実した活動ができた。また、神戸電鉄の活性化に向けた取り組みや北播磨のゆるきやら作成など例年以上に地域との連携が見られる取り組みができた。販売実習では、地元企業に協力をしていただき、商売の厳しさ等を学ぶ機会となった。	A		連携していただける小学校・中学校に対する理解や実施時期および内容の調整・準備に多くの時間が必要となり、担当者との打ち合わせは緊密にとる必要がある。小野市モデリングタウンの活動に積極的に参加する必要がある。イベントの規模が大掛かりになってきており様々な関係機関との調整等が必要である。	各取り組みが学校教育活動の一環として定着してきており、各協力機関との連携がよりスムーズに進行していけるシステムを確立する。仕事が一部の教師に偏らない仕組み作りが必要であるとともに、計画を立案する段階で、余裕を持った日程を決める必要がある。誰が担当しても一定以上の成果をもたらせるようなマニュアル・シラバスなどを作成する必要がある。	
	3 インスパイア・ハイスクール事業において、兵庫教育大学と高大連携により探究の手法を学ぶ。	科学総合	前年までの取り組みとその成果を引き継ぎ、課題研究である「探究」へとつながる課題設定能力やプレゼンテーション能力を養う機会が得られた。	A		兵庫教育大学を訪問し、研究室見学と講義を受けたことが、探究活動に必要な能力の育成に必ずしも直結しているものばかりではない。	活動により養いたい能力を明確にし、事前に講師の先生と事業内容の検討を今以上に具体的に進めておく。	
<p>学校関係者評価</p> <p>&lt;評価方法について&gt;</p> <p>・小野高校の学校評価における項目設定や年鑑の評価スケジュールの大枠は概ね妥当なものとなっている。特に年間二回の学校評価アンケート実施は、短いサイクルでの学校の取組改善を可能とするものであり一定の評価ができる。</p> <p>・これまで学校でつくり上げてきた評価の枠組みを信じて、「血の通う」運用を心がけることが肝要である。この点、本年度の学校評価について言えば、①学校自己評価報告の「成果」「課題」欄の記載が昨年度と同様になっている項目が見られる点について、そうした固定化の理由を検討し改善に努めること、②第一回学校アンケート実施時において、学校評価の各項目の中間的な検証・改善策の検討も合わせて図ること、といった改善が今後図られるとよいと考える。</p>								